

よ



理論

913/湖 (みずうみ)

早船ちよ (はやふね・ちよ)

理論社/1966 年初版

378 p/19 cm/B 6 判

禁無断上演上映放送

湖 (みずうみ)

一九六六年八月 第一刷

定価五二〇円

作者 早 船 ち よ

発行者 小 宮 山 量 平

東京都千代田区神田神保町一の64
発行所 株式会社 理論社

電話東京(二五)六五〇一(代)
振替口座東京九五七三六



* はじめに *

湖は

釜を たぎらせる

青みどろの底ぶかく 熱い湯を噴く。

ゆうべに ひとつ

赤い日を 呑み

—— 銀の月を 吐く。

あしたに ひとつ

白い月を 呑み

—— 金の目を 吐く。

湖は

釜で マユを煮る

波をゆすりゆすり 金銀の糸を挽く。

湖／もくじ

序章 はじめに／1
ちさのノート

第一章

1 白い花・花
2 四つの手紙
みつ子の手紙／36
糸之助の手紙／40

3 かわいた職場
黒木克彦の封書／47
杉太郎記す／43

4 盗む
ちさのノート／56

5 眠れない夜々

6 青空と太陽が

7 新しい日々

5

36 12

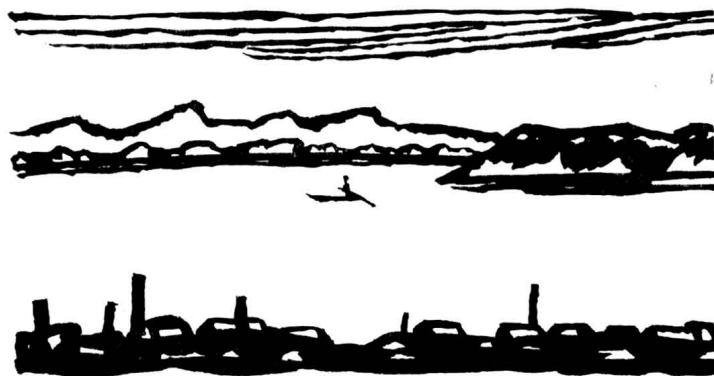
48

64

81

112

129



- 8 給料日
 9 盗まれる
 10 やるせないアンパン
 11 コンクリートな壁
 12 美しい繊維をつくる
 13 盲目のボギー
 14 都市の顔
 15 白い鳩の群

第二章

- 16 霧深い湖
 17 汽笛の音いろ
 18 ひそかな ねがい
 19 あね・いもうと
 20 夕日燃えたぎる湖
 あとがき／373

294 275 268 248 218 184 171 155

358 348 334 321 309

そうてい・カット

滝平二郎

* 本書の刊行にあたって／編集部から *

この作品は、もともと作者の処女作として、「文芸首都」「若草」その他に発表された一連の半自伝的作品を土台とし、今回新たに、

第一部／峠（とうげ）

第二部／湖（みずうみ）

第三部／街（まち）

の三部作の長編小説として書きおろされたものである。各巻ごとに独立の内容をそなえてはいるが、全三巻をつうじて、ひとりの働く女性の成長が、その出生の根源から昭和時代をつらぬいて描かれることになっている。

序章　ちさのノート

——ちさ、汝に話がある。

父は、あのとき、つねになく改った調子で、きりだした。

ちさ、お身は、ここ二年ほど、小学校教員の免状を取らずとして、一生けんめい勉強したな。……試験検定も、あと三課目といういまになって、こんなこというのは辛いんじゃが、頼む。京都にちかい琵琶湖畔の、TYレーヨンへ働きにいつてくりよ。

父の糸之助は、昭和四年ごろから、二年ごし夜逃げしようと考えている。二年まえの秋のころ、アメリカは、空前の経済恐慌に見まわっていた。そのため、日本経済を大きく支えている生糸の輸出がふるわなくなった。第一のお得意さき、アメリカが、生糸の輸入を大きく制限し、あまり買ってくれなくなったからだ。

——不景気も、どん底じゃ——といわれながら、昭和四年、五年、そして、ことし（六年）と、アメリカにはじまる世界的な経済恐慌の影響は、ますます日本のなかで深刻になっていく。糸の相場は下落し、マユ値も安くなるばかり、日本は都会も農村も、底知れぬ不況におちこんだ。新聞には、東北農村の欠食児童や、都市の失業者の記事が、でていない日はない。

わたしの家、小料理「舟ばし楼」は、いま、どたん場ともいうべき苦境に押しつめられている。わたしは、よく知っている。家計も、商売も、にっちもさっちも、いかなくなってきているのを。

父は、一家四人——母のはる、妹のみつ子、弟の杉太郎をつれて、どこか見知らぬ町へ去ろうと決心した——という。

——ちさ、たのむ。汝^{みづ}ひとりを、この土地へ残して、教員さしとくわけにはいかんぞな。

——ちさ。おらあ、どっこへも逃げんぞ。——そばから、母がいどむようにいう。

——おら、どっこへも逃げんぞ。たとい、商売がたちいかんでも、借金踏みたおして姿をくらます極道^{ごくどう}なまねはせん。

——ふん、そんなら汝^{みづ}、ここで、どうやって食っていく。

——二階借りして、お針してでも、一家食うぐらいのことはできるも。

——借金の利子をどうする？

——待ってもらうも。

——誰が、待ってくれるか。責められるぞ。

——手^てえついて、頭を下げる。あやまるものを、なぐるの、殺すのっていう人もあらまいで。

——ばか、云え。それで人間、義理がすむか。

おきまりの果てしのない口争いがはじまる。……父は、さらに、わたしの説得にかかるのだ。

——よしんば、はるのいうように、二階借り生活になったとして、見っとものうて、先生ができるか。ひとに、馬鹿にされるに。どっちにせよ、ちさは、レーヨン工場へ働きにいけ。

父は、写真入りの募集広告をひろげて、みせながらいう。

——養成女工^{せいせい}つても、TYレーヨンは、近代工場^{けんたいこうじょう}じゃ。信州へ出稼^{しゅけ}ぎにいく、糸とり女工の倍以上の金になるんじゃ。悪い話では、ないぞ。

わたしは、募集規定をたしかめる。——日給七十銭。寮費や食費をさしひいても、一カ月に十五円ちかくのこるだろう。それは、小学校高等科卒業の女子として、高給にちがいない。

——食わせてもらって、十五円。一流製糸工場の糸^{いと}とりの倍じゃ。こんな、うまい話はないぞ——と、父はいう。

(どうして?)とも考えず、わたしは、承知した。

わたしが、TYレーヨンへ出発するあさ。父は、さらに、念をおした。

——お身がTYレーヨンに、おちついたら、問もなく、俺^{おら}ん家は、この町を逃げていく。いか。向うの寮へはいつでも、高山の誰とも、つきあってはだちかんぞ。

——滝先生や、葱俊枝^{しゆんえだ}とも?

——おう、お。林田さんや、新聞社のやつらにもじゃ。誰にも、手紙をだすな。家では、でかい借金放^{はな}かつといて、逃げていくんじゃ。決して、手紙をだすなよ。もしかして、郵便局のやつにでも、居場所を嗅^かぎつけられてみよ。お身にも、追手がかかって、責められるぞ。

父は、ことばの強さとは逆に、目を、しょぼしょぼさせて、手について頭を下^さげんばかりに卑屈にした。

——こうなれば、お身が頼りじゃ。稼いだ金は、無駄使いせず^{むだつか}に取つとけよ。おりたちが、どこへ行くとも、そこで出直すためには、汝^{わが}の送金^{そうきん}が頼りなんじゃ。金のことだけは、けっ

して忘れんなよ。

その朝、母は、わたしを募集人の家まで見送りながら、みちみち、いった。

——よけいな心配するなよ。おら、どんなことがあっても、石にかじりついて、この土地でやっていくつもりじゃで。

——どっこへも行かんの。

——おりを信用してくりよ。土地でやっていけんものが、どうして、見知らぬ町で暮していけすか。おらあ、父っあまを、そこまで信用しきれんで……、なあ、ちさ。

母は、足をとめて、わたしを、まじまじと見た。

——頼りになるのは、お身ばかりや。レーヨン工場で稼いだら、父っあまなんか、ぜにを送るな。あとで送り先を知らせるで、内しよで、おりに送れ。な、このことだけは、忘れてくれるなよ。

*

わたしは、TYレーヨン石山工場のトレーニング女工になった。なかば、自分から進んで、こへやってきた——と、いってもよい。

両親の衆之助とはるが、争い、いがみあいつづけているなかで、わたしに求めているもの、求めつづけてきたものが、「稼ぎ」だと知った。わたしは、むしろ、気が軽くなった。一カ月十円なにかしかの、家への送金。それだけを、きちんきちんと送金すればよいのだ。そのほかに、何も求められていない。

——肉親へのつながり。そんなものがなくても、わたしは、ここで働き、生きていくことが

できる。

*

友情だって、そうなのだ。

——手紙をだしてくれるな。高山の誰とも、つきあってくれるな。そう、父がいう。だから——というわけではないが、友人とのつながりも、このさい、断ちきろうと思う。

小学校時代からの友だち、葱^{しよぶ}俊枝。飛州日々新聞の職場で知った若い記者の黒木克彦。このふたりとの友情を、わたしは大切なものにおもう。わたしの生涯の友人といってもよいだろう。だが、わたしは、そのふたりに、一言も、別れを告げずに、石山へきてしまった。

それから、「ちさを恋している」と告げた林田宏にも。

黙って、ひとりぼっちで故郷を去ることが、何ものかへの痛烈な復讐であるような錯覚を、わたしは、しっかりと抱きしめていた。

ひとりぼっちが、何だろう。友情なんかなくても、わたしは、生きていける。——負けおしみのように、わたしは、そう考えようとした。肉親や友人への愛情なんか、こっちから切り捨ててやっていい。——そういう気持ちにつきまとう甘えや、虚栄や、偽善や羞恥のお面をかぶった道徳なんかこそ、あの古めかしい故郷の町へ、そっくり捨て去るにふさわしいものなのだろう。あらゆる種類の怯懦^{きようた}、そして、センチメンタリズムも。

*

それだけでは、たりない。わたしは、えらそうな顔をしている自分じしんを、思いきり、いためつけて思い知らせてやろうと思う。

まず、「方言をつかうな」、「故郷なんか、じぶんのほうから、シャット・アウトせよ」。

——わたしは、自分じしんに命令する。

わたしの故郷——ふるい城下町、飛驒ひだの高山。そこは、山また山が重なりあって、他の地方から隔絶され、すべての古いもの、古風なものが、そのまま温存されている。昭和六年のいまだに、汽車も通ぜず、交通の便がわるい。他国から入ってくるひともし少ない。そのためか、いまだに古語そのままが、日常生活のなかで、生きてつかわれている。

「御身」「汝」「汝」「調度」「ござる」……などなど。悠長で、みやびやかな、そうしたことは、これからのわたしの「新しい生活」にはふさわしくないだろう。

ふるさとのことばを捨てる。——それは、さしてむずかしくないように思える。なぜなら、わたしはそれを、小学校のなかで、「汚いことば」として、八カ年にわたって禁止されてきた。そのかわり、教科書調の「良いことば」——標準語をつかう、という教育をうけてきている。わたしにとって、「ふるさとのことばでものを考えない」こと。そうした規制だって、できそうに思うのだ。

このノートは、去年の使いふるしの日記帳にかいている。使いふるしといっても、大型のルーズリーフ・ノートのところどころに、ほんの二、三行ぐらいずつしかかかれていない。——ということ、わたしの十六歳が、文字でかきとめるゆとりもないほど、忙しかった、といえよう。

去年の、きょうの日付けには、左の四行が記されている。

*

「きのう、七月いっぱい、飛州日々新聞社を退職。きょうから一カ月半は、計画的に、教員検定受験の勉強をする」

メモ 心理学——潜在意識の項を熟読、ぬき書きすること。

メモ 前年度の倫理の試験問題は「かんが惟神の道とは、これ如何」

*

今後、去年（昭和五年・一九三〇年）のノートの部分には、赤鉛筆の「」でかこんでおき、今年の分と区別することにする。

*

一九三一年——ことしのノートを、（一九三〇年）の後へかきこんでいきながら、わたしは、はっとおどろく。二年つづきの生活ノートが、人生のある一カットを、まざまざと、のぞかせてくれるからだ。

並べてかかれた二年間の対照が、ふっと怖くさえる。

わたしは、来年は、ことしのあとのページへ、ルーブリフの紙をはさみ足して、ノートをしるしていこうと思いついた。すると、今年のいまとは、何だろうか。わたしは、いまをしるしていく。そのときどきに、わたしは、過去と未来にはさまたいまを、ノートしていくだろう。

第一章

* *

1 白い花・花

午後四時。——青い夏空をつんざいて、終業のサイレンが鳴りひびく。

杉戸ちさは、終業時のサイレンの音がすきだ。とくに、きょうは、胸をふるわせ解放感と飲よろこびをこめて、たかだかと鳴りわたっているように思える。TYレーヨン・石山工場三十万平方メートルの構内に、整然と幾棟も並んでいる建物のどの扉も、サイレンの音とともに、さっとひらかれる。と、白い軽快なスカート、白いキャップの三千人の女工が、どっと、戸外へ溢れでる。白いズックの足が無数に跳ねながら、走る、走る。

杉戸ちさも、その白い花花にまじって、洗面所から更衣室——寄宿舎へつづく三百メートルほどのブラットフォームをかけていく。寄宿舎、石竹寮の昇降口に、緑いろの告知板がかかっている。そのまえに、人だかりがして、賑やかな、歓声がはじけていた。

お知らせ

きょうから終業後一時間、琵琶湖で水泳をいたします。石竹寮の総員二百名は、第二工場わきのガラ捨て場へ、すぐ、集まること。

昭和六年八月一日

責任者

撰別部長 亀岡仁兵衛
石竹寮寮母 泉野しん子

杉戸ちさと前田せい子が、つれだって、第二工場わきのガラ捨て場へいくと、もうブルーズ姿の女工が、たくさんあつまっていた。

そのなかには、石竹寮の約百人のトレニング（養成）女工がまじっていた。ことしになって、もう何回か、新設工場のために、全国各地から、かき集めてこられた十三、四歳から十七、八歳まで——で、ちさも、せい子もそのなかのひとりである。

亀岡仁兵衛部長と、石竹寮の寮母・泉野しん子が、つれだってやってきた。

バラバラと、待ちかねた拍手がおこる。

「みなさーん！ 石竹寮の木工、ならびに、トレニング工のみなさーん」

せいの低い亀岡部長は、切石の上へのぼって、爪立ちした。

「きょうから、琵琶湖で水泳をすることになりました。終業後、一時間ずつ、一週間、ひきつづいて行います」

効果を十分に知っている亀岡部長は、ここで話をきった。

わっ！ と、養成工のなかでも十四、五歳のおさない一群がわきたった。

トレニング工は、入場して一カ月は、外出禁止ということになっている。生まれ故郷の家を遠くはなれ、ひとりとして知るものもない他人のあいだで、彼女たちは、馴れないしごとを見習っている。はじめの一カ月は、つらく苦しいことが多い。気持の動揺と、淋しさから、故郷の父母のもとへ逃げかえってしまうもの。外出先から、ふらふらと、誘惑されて行方不明になるものもいる。入場して一カ月間の外出禁止では、まだ定着には不十分だと、工場がわは考え

*

る。そこで、三カ月めぐらいまでは、本工といっしょに外出するように——とも、注意している。

寮の生活にも、しごと場にも馴れて、それが平常の生活になり、気持ちに落着きがでるのは、いちおう半年。ほんとうは、一年かかるといわれている。それは、彼女たちをかき集めてきた募集人への報償金に、はつきり、あらわされている。報償金は一時払いでなくて、三カ月後、半年後、一年後と、分割スライド制がとられている。ちさは、それを、ここへきて、はじめて知った。募集人である、高山の古物商蔦屋の内儀が、しんぼうして定着するよう、ここへ連れてくるときも、くどくどと、くりかえしていった。就職後も、つらいことがあったら、何でも自分のところへ相談するように——と、あとから、ハガキをよこしている。

「静かに、皆さーん。——静かに」

身だしなみのよい亀岡部長は、白麻の上衣のボタンを、きちんとかけている。ほんとうの年令は、まだ四十歳になるかならずというのに、ろ頂部が、すっかり禿げあがっている。どうみても五十歳以下とは見えない。白いハンカチで額をふくと、演説好きの彼は、一句、一句に区切りをつけて訓示した。

「……ええ、くりかえして中上げます。当TYレーヨン工場は、いまの日本において、最高度に整備された近代工場であります。その近代工場の、えらばれた工員であるという誇りを、はつきり認識していただきたい。工場の最新の機械、設備、機構。それに、ケミカルといえますか、化学的な工程・操作の、どの点をとっても……」

亀岡は、大きく息をすいこみ、胸を反らせて、女工のひとりひとりを、堀ぎわのちさやせい